



新潟県

# 水海研だより

'26/1  
第52号



写真：佐渡の定置網で漁獲されたヒラマサ

## '26/1 52号 トピックス

- 新年のご挨拶  
所長 樋口 正仁
- ヒラマサについて  
漁業課 丸山 克彦
- サケの稚魚調査始めます  
増殖環境課 大野 佑紀
- 2025年8月～10月観測の表層水温で過去最高を記録しました  
海洋課 小池 勉

## 新年のご挨拶

所長 樋口 正仁

2026 年を迎え、新年のご挨拶を申し上げます。

昨年を振り返りますと、梅雨入り・梅雨明けが記録的に早く、7 月には少雨・高温が続き、夏季の高温傾向が常態化していると思う 1 年でした。全国的には、黒潮の大蛇行が終息し、サンマやスルメイカ等の一部の魚介類の漁獲動向に変化が見られました。新潟県では、マダイやアマダイの漁獲が安定していますが、スルメイカや秋サケの不漁が顕著となり、年末の寒ブリ漁についても少ない状況でした。

日本の水産業界を取り巻く現状を見ると、日本での魚介類の一人あたりの消費量は 2001 年の 40.1kg をピークに減少し続け、2023 年には 21.4kg とピーク時のほぼ半分となっています。このような魚離れと呼ばれる国内消費の低迷は、水産物の価格形成にも影響を与え、漁業経営をより圧迫する要因になる恐れがあります。

また、当所では一年を通じて海洋観測を行っていますが、2025 年 8 月下旬における北部海域表層の平均水温が 30.4℃となり、平年より 3.9℃も高い値となりました。国立研究開発法人水産研究・研究教育機構によると、このような高温傾向は、日本海全域で確認され、表層だけではなく、水深 50~100m でも進んでいます。さらに、春季の日本海東部の沿岸から沖合海域では低塩化傾向が認められ、昇温・低塩化による日本海の生態系への影響を危惧しています。

自然環境が変化しつつあるなか、水産資源に対しては、漁獲可能量 (TAC) を基本とした資源管理が行われ、ブリが 2025 年 4 月から、ベニズワイ日本海系群では 2025 年 9 月から段階的な TAC 管理が新たに進められています。水産業界全体を見

渡してみると、自然環境や社会情勢が大きく変化する時代に入っている可能性があり、新潟県の水産業界においても、これまで以上に変化が求められるのではないかと考えています。

このような状況の中、当研究所では、ブリやマダラをはじめとした多くの魚種の資源状況を分析するとともに、カレイ類の分布やサワラの繁殖生態等、新潟県沖の魚介類の現状がどのようになっているかを調査しています。特に、サケについては、本年度から稚魚の降海後の分布や沿岸環境、餌生物に関する調査を行います。また、沿岸漁業の所得向上に向け、沿岸資源の増養殖研究にも継続して取り組んでいます。特に、藻場礁を活用したホンダワラ類の藻場造成技術の開発や、各地先で利用されている定着性の水産資源の分布や成長に関する調査を行っています。さらに、ワニエソの焼き干し等の低・未利用資源の加工品製造技術を開発するとともに、小売店・飲食店での利用拡大に向けた指導を行っています。

世界的な気候変動や水産資源管理を取り巻く環境は依然として厳しく、持続可能な漁業の実現に向けた科学的根拠の強化が、これまで以上に求められています。当研究所では、本年度も資源評価技術の高度化、養殖技術開発、未・低利用資源の高度活用などに取り組み、社会に貢献する成果の創出に努めてまいりますので、皆様方からの変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。最後に、2026 年が水産業にとって明るい年になることを祈念して新年の挨拶とします。



エソの焼き干し

## ヒラマサについて

漁業課 丸山 克彦

### 【はじめに】

私がブリの担当になって5年目になりますが、過去4年、寒ブリは不漁が続いています。特に2024年漁期は歴史的な大不漁でした。そうした中、ブリの仲間であるヒラマサは豊漁でした。市場に並んでいるヒラマサはちょっと見ただけではブリと区別がつかないくらい似ています。農林水産統計ではヒラマサはブリ類として集計されていますが、市場では明確に区別されて取引されています。ここではブリとヒラマサの見分け方や漁獲動向等について紹介します。

### 【ヒラマサの見分け方】

ヒラマサの体形はブリに比べると扁平で、①胸鰭の付け根と黄色の帯が近く、②上あごの角にやや丸みがあることで区別できます（図1）。

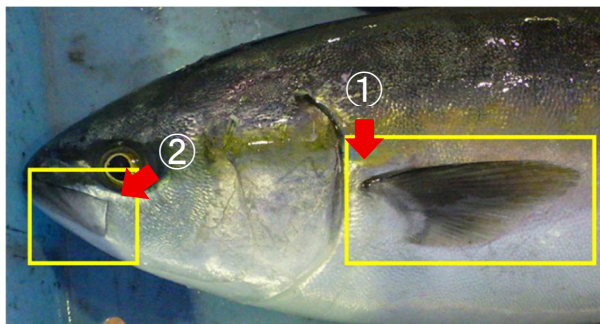
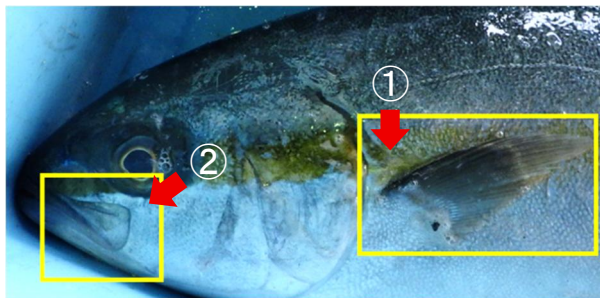


図1 ヒラマサ（上）とブリ（下）の区別

以前から天然物でもブリとヒラマサの交雑個体の存在が知られていましたが、最近では近畿大学がブリの卵にヒラマサの精子をかけて交雑魚を作出し、ブリヒ

ラとして商品化しています。

### 【漁獲動向】

2020年～2024年の本県のヒラマサの漁獲は、数量では44～102トンで平均57トン、金額では2,800～5,800万円で平均3,800万円でした。地域別では、数量・金額ともに佐渡が73%、上越が16%で、佐渡で最も多く漁獲されています（図2）。漁法別では、大型定置が数量で79%、金額で76%、小型定置がそれぞれ12%を占め、定置網による漁獲が主体でした（図3）。ヒラマサの漁獲の主体は、ブリ同様に佐渡の大型定置網になります。

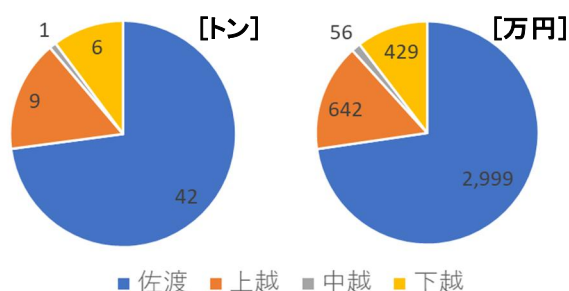


図2 2020～2024年のヒラマサの地域別平均漁獲量（左）と平均漁獲金額（右）

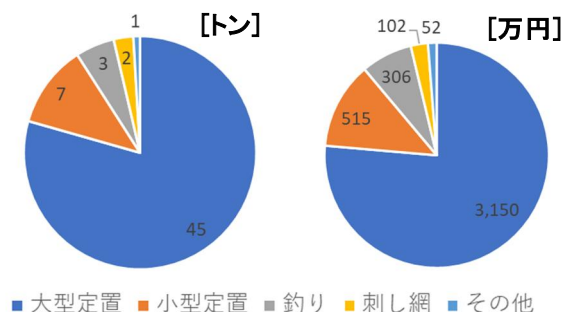


図3 2020～2024年のヒラマサの漁法別平均漁獲量（左）と平均漁獲金額（右）

ヒラマサの月別の漁獲量には、5月と12月にピークがあり、2月の低水温期及び8月、9月の大型定置網の休漁期は少なくなります。ブリも5月と12月に漁獲のピークがみられますが、価格の推移は異なります。ヒラマサの年平均単価は807円/kgでブリの407円/kgの約2倍です。ヒラマサで魚価が高い時期は7～9月で1,000円/kgを超えています。一方、ブリでは寒ブリが水揚げされる12～1月に単価

が上がりますが、この時期、ヒラマサは小型魚（1kg前後）が主体のため単価は低くなっています（図4、5）。

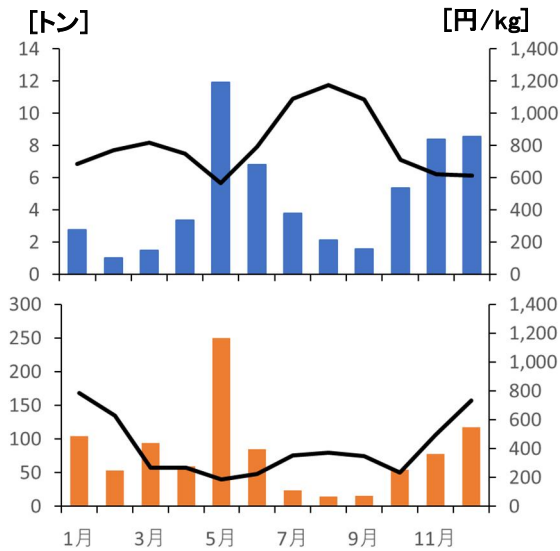


図4 2020～2024年のヒラマサ（上）とブリ（下）の月別平均漁獲量（左目盛：棒）と平均単価（右目盛：折線）

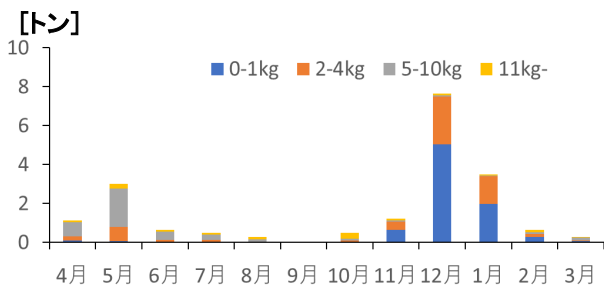


図5 2023年の両津湾大型定置におけるヒラマサの月別体重区分別漁獲量

長期間の漁獲の推移を把握するため、佐渡両津湾大型定置4カ統の漁獲情報を取りまとめました（図6、7）。1970年代からヒラマサは漁獲されており、地球温暖化によって急に漁獲されるようになったわけではありません。1980年代、新潟県で寒ブリがほとんど漁獲されなかった期間がありますが、この時ヒラマサもほとんど漁獲されず、1990年代になって漁獲が上向き、その後漁獲が好調となっているところなど、ブリと漁獲のトレンドがほぼ一致しているといえます。ただし、漁期は少しずつ変化し、2000年代に入るまでは4～6月の春季の漁獲はほとんどあ

りませんでした。春季の漁獲が徐々に増え、2020年代には5～10kgサイズの明瞭な漁獲のピークがみられるようになりました。これらのように漁獲量や漁の時期が少しずつ変化してきています。

ヒラマサは、一年を通じて比較的味の落ちない魚で、新潟県では夏場の魚枯れ時期の貴重な刺身魚です。これからも漁獲が継続し、馴染みの魚になることを期待しています。

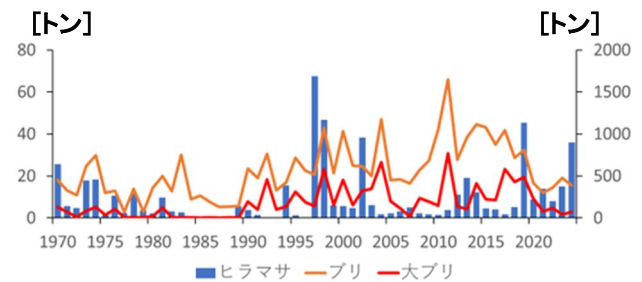


図6 1990～2024年の佐渡両津湾大型定置網4カ統のヒラマサ（左目盛）とブリ（右目盛）の漁獲量の推移

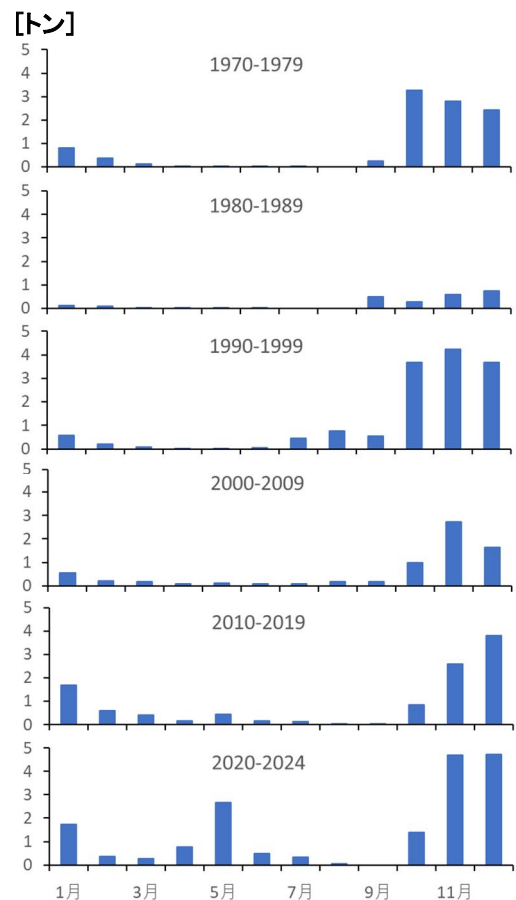


図7 佐渡両津湾大型定置網4カ統のヒラマサ年代別月別平均漁獲量

## サケの稚魚調査始めます

増殖環境課 大野 佑紀

### 【調査の背景】

サケ（通称：シロザケ、秋鮭）は近年、全国的に深刻な不漁が続いています。当県においても令和3年から来遊数の減少傾向が続き、令和7年は平年（H23～R6）の僅か6.7%にまで落ち込んでしまいました（図1）。

サケは人工ふ化放流による資源増殖の試みが古くから続いており、10年前まで資源量は安定していました。人工ふ化放流とは、秋に母川回帰したサケから卵と精子を取り出し人工受精させた後、1g程度の稚魚になる春まで飼育し、河川に放流することです。県内約20か所のふ化場で各漁協や増殖団体によって毎年実施されています。

さて、サケが急激に獲れなくなった原因の究明と対策が求められますが、サケは河川で誕生し、海に降りると最初の夏をオホーツク海で過ごし、その後、3～5回ほどの夏をベーリング海で過ごした後産まれた川に戻ってくる回遊魚です。そのため、いつ・どの段階で・何の理由で数

が減っているのか、原因となりうる要素は数多く考えられます。

当所の分析により、当県においてはサケの稚魚降海期である早春の沿岸海面水温と、3年半後の来遊数との間に強い相関があり、図2のように海に降りる時期の低水温期間が短いほどその後の来遊数が減少する可能性が高いと考えられました。そこで、春の沿岸環境をさらに詳しく調べ、沿岸での生残に効果的な稚魚の飼育・放流方法を明らかにすることを目的に、新たな調査研究を開始しました。

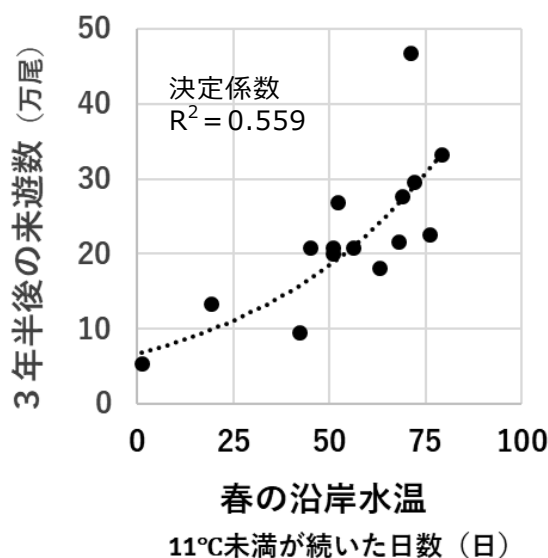


図2 沿岸水温と来遊数の関係

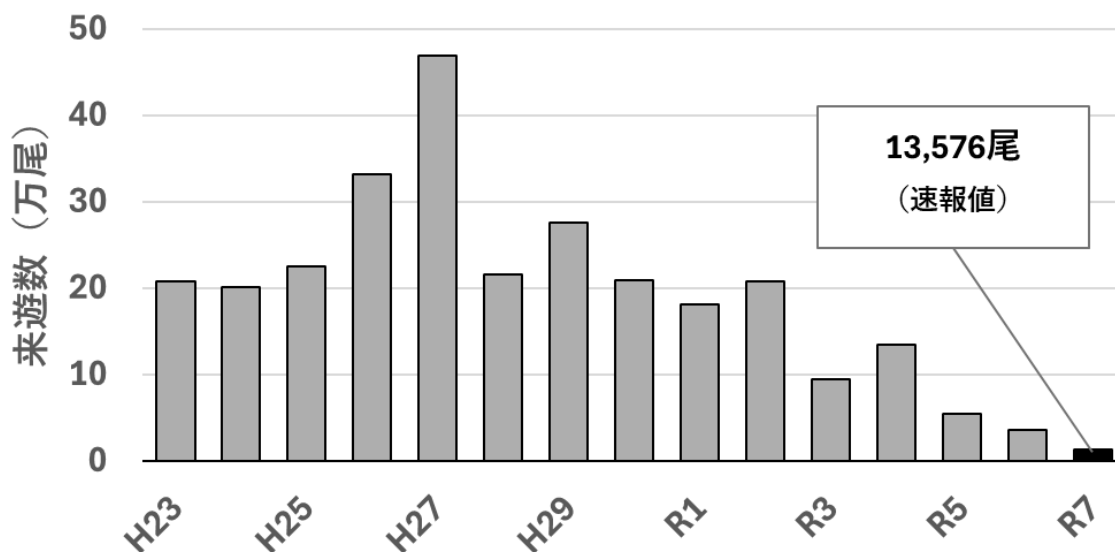


図1 県内サケ来遊数（万尾）

## 【調査の概要】

本調査は、水産庁委託事業「さけ・ます不漁対策事業」の一環で当所、内水面水産試験場、(国研)水産教育・研究機構等と協力して実施しています。当所は令和7年度から参画しました。

調査の大きな目的は、サケ稚魚が生き残りやすい降海後の沿岸環境を把握することによって、放流効果を高めることです。

## 【調査計画】

### ①放流効果向上試験

降海期の生残状況の違いを評価するため、放流サイズと放流時期の異なる稚魚にそれぞれ標識を付けて2月末～3月中に放流します。

この試験では、能代川ふ化場(五泉市)にご協力をいただいています。

### ②沿岸調査

放流された稚魚が沿岸域に滞在する3月及び4月に調査船「越路丸」による沿岸調査を次のとおり行います。

#### (1) 稚魚採捕調査

図3に示した調査定線において、表層トロールの水平曳きにより稚魚を採集します。採集された稚魚について分布密度・成長度合い・標識の有無・胃内容物を調べます。

これにより、稚魚がいつどこを回遊しているのか、何を食べて成長しているかを把握します。また、標識個体が多得られた場合は、放流日から何日でもどこまで回遊してどのくらい成長したのかが分かります。



図3 調査位置図

#### (2) CTD観測

図3の調査定点において、沿岸域の水温や塩分を測定します。

得られたデータと稚魚の分布や密度などを照らし合わせることで、稚魚の生残条件を把握します。

#### (3) 動物プランクトン調査

CTD観測と同じ調査定点において、プランクトンを採集し、その種組成から稚魚の餌環境を調べます。

餌環境を把握することで、適切な放流時期を検討します。

## 【おわりに】

本調査から得られるデータを積み重ね、例えば「沿岸水温が何℃の時にどれくらいの稚魚サイズで放流すると良い」といった放流基準の作成に向けて取組を進めていきたいと考えています。

温暖化に伴う海の環境変化を食い止めることは難しいですが、飼育や放流の方法を少しでも改善し、以前のようにサケが多く帰ってくることを願います。



サケの採卵作業

## 2025年8月～10月観測の表層水温で過去最高を記録しました

海洋課 小池 勉

2025年の夏は記録的な猛暑となりました。新潟地方気象台が発表した新潟県内の気象概況では7～9月の平均気温が「かなり高くなった」としています。この猛暑の影響は海上でも現れました。

水産海洋研究所では、漁業調査船・越路丸により1月を除く各月（観測日は前月27日から当月13日までの間）の海洋観測を実施し、表面近くの水温（以下、本稿では「表層水温」とする。）を観測しています。（写真1）

越路丸の海洋観測で得られたデータを解析したところ、県全域平均の2025年8月から10月の表層水温は、1991年～2020年の30年平均値を大きく上回り（図1）、過去最高を記録した海域も確認されました。過去最高を記録した事例を以下に記します。



写真1 観測の様子

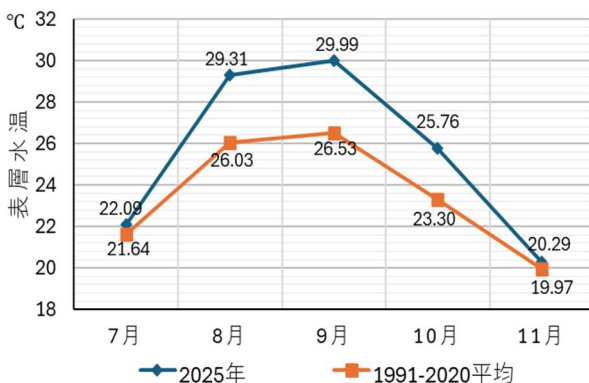


図1 県全域平均の表層水温と30年平均値

### 【8月】（図3・上）

- ・外佐渡海域平均(28.82°C)で過去最高を記録
- ・新潟沖の定点(Stn2・31.70°C、図2)で過去の全ての定点別観測値の中で最高値を記録  
(2025年の観測日は7/28～31)

### 【9月】（図3・中）

- ・北部海域平均(30.40°C)、南部海域平均(29.84°C)、県全域平均(29.99°C)で過去最高を記録  
(2025年の観測日は8/25～26)

### 【10月】（図3・下）

- ・南部海域平均(26.17°C)、外佐渡海域平均(25.36°C)、県全域平均(25.76°C)で過去最高を記録  
(2025年の観測日は9/30～10/2)

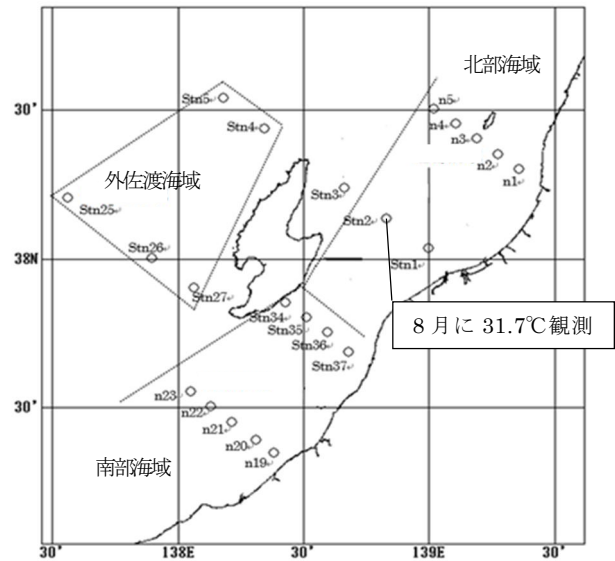


図2 観測海域図

このような海水温の上昇は、魚介類の分布等に影響を及ぼすことが懸念されます。水産海洋研究所では今後も海洋観測を続け、魚種・漁獲量の変化に注視していきます。

海洋観測による各月の水温の詳細は県ホームページでご覧いただけます。

<https://www.pref.niigata.lg.jp/site/suisan-kenkyu/kaikyou.html>

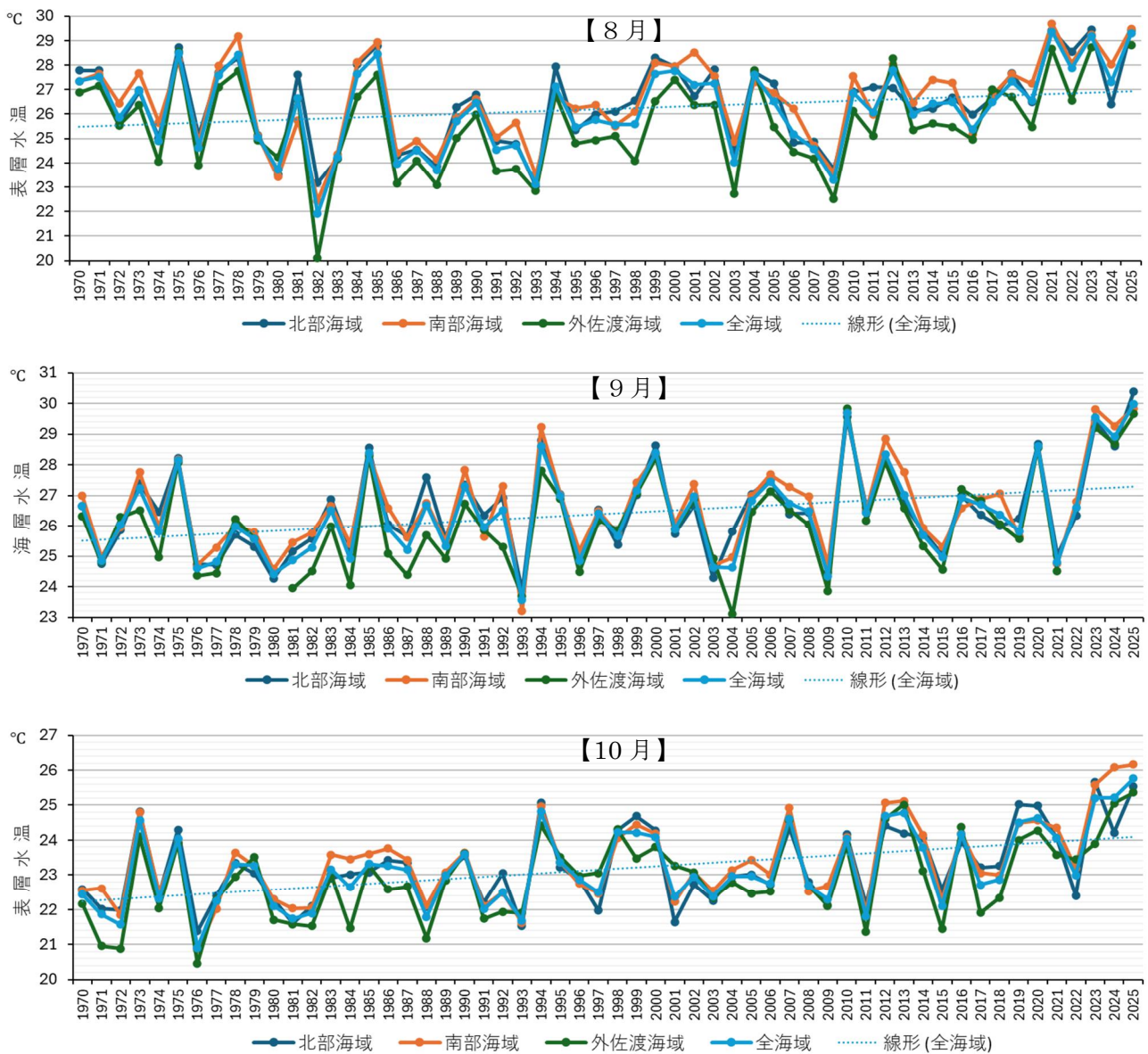


図3 8～10月の新潟県沖表層水温の推移



**新潟県水産海洋研究所**  
 〒950-2171 新潟市西区五十嵐3の町 13098-8  
 TEL 025-261-2041(代表) FAX 025-261-0335  
 URL <https://www.pref.niigata.lg.jp/site/suisan-kenkyu/>

**新潟県水産海洋研究所 佐渡水産技術センター**  
 〒952-0317 新潟県佐渡市豊田 2082  
 TEL 0259-55-2630 FAX 0259-55-4165

**新潟県**